

「活動の概要と研究成果」

NO.J2416

活動題目:1950年代の中国共産党のチベット政策

所属:慶應義塾大学法学部

氏名:金牧功大

本活動の目的は、中国共産党の少数民族政策に関する新しい大量の資料を収集し、1950年代、より正確に言えば1949年の中華人民共和国建国以降、文化大革命の開始(1966年)に至るまでの中国のチベット政策の変化の過程を、詳細に描き出すことにある。本研究の対象に含まれる1950年代は、十七条協約によってチベットの中国への帰属が決定したり、ダライ・ラマ14世がインドに亡命したりするなど、今日の中国・チベット関係の原型が形作られた時期である。チベット独立派や党による主張から距離を置き、あくまでも一次資料に基づき、この時期における党のチベットに対する認識、政策、およびその実態を眺めてみることは、いわゆる今日の「チベット問題」の根源にせまる作業と言いうる。

では、依拠すべき一次資料はどこにあるのだろうか。筆者が目をつけたのは第一に、1959年にダライ・ラマがラサを離れ、翌1960年にその本拠地を置いたインドのダラムサラ(ダラムシャーラ)にあるチベット亡命政権の各種研究所である。第二に、オーストラリアのキャンベラにある国立図書館である。本図書館には、近年公開された『中共重要歴史文献滙編』が収蔵されている。これは一次資料を大量に含み、それゆえ高い学術的価値を有している。

筆者は2024年度、公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団から研究助成を受け、上記の両施設を訪問し資料収集をすることが叶った。インドのダラムサラは9月に訪問し、オーストラリア国立図書館には11月に訪問することができた。その結果、膨大な——数千ページにわたる中・英・蔵語の資料群——を収集することができたのみならず、ダラムサラにおいては亡命政権関係者や亡命者、チベット仏教関係者から聞き取り調査をすることができた。こうして得た知見は、今後も引き続き研究成果として公開してゆくことになる。

こうした調査は本助成なくして実現できなかつた。心から御礼申し上げる。